

『徒然草』学習指導の試み

—— 表現を軸として ——

渡 辺 春 美

はじめに

古典の授業に生き生きと取り組ませるにはどうすればよいのであろうか。繰り返し指導して来た『徒然草』であるが、これまで生徒の興味・関心と結び付けて作品を理解させることが十分にできなかった。一部の章段を除くと、兼好のもの見かた、考え方、感じ方と生徒のそれとの間に意識のずれもあり、その反応は平板で乏しく、授業の準備の割には、手ごたえの得難い教材であった。

昨年度（一九九五年度）、三年生を担当し、『徒然草』のいくつかの章段をまとめて指導する機会を得た。そこで、今回は、いくつかの観点を設けて教材を分類し、表現指導と関連させて授業を進めることを考え、授業を試みた。

本稿では、授業の実際を紹介し、以下に取り上げる四点の工夫を中心に、学習指導の有効性について考察したい。

一 学習指導計画

1 学習指導の工夫

徒然草の学習指導を計画するにあたり、ア・教材の開発、イ・学習目標の明示、ウ・学習テーマの設定、エ・構造的な板書などの他、次の四点を工夫した。

① 理解の観点設定

ア・世界観、イ・人生観、ウ・社会観、エ・自然観、オ・人間観を観点として設定した。観点の設定によって、教材の読みの切り口が見いだされ、教材との対話の通路が開け、理解が深まると考えた。

② 指導過程——基本学習から発展学習へ

基本学習の理解に立って、自ら関心のある章段を選び、主体的に読み、表現する学習を発展学習として設定した。

③ 理解と表現の関連指導

基本学習における、ア・感想、イ・小論文と感想文（選択）と、発展学習としての、ウ・要約と感想との三

つの表現の場を設定した。ア・感想―ひとまとまりの教材を学習することに、感想文を書かせた。感想文は、読みの反応を意識化させる。その意識化が、生徒各自にとっての読みのおもしろさを引き出し、興味関心を深めると考えた。イ・小論文―基本学習の結びとして、兼好のものの方・考え方・感じ方を精確にとらえさせるための一つの方法として課した。

④ 学習課題・学習の手引の作成

ア・学習課題―学習目標の明示、授業展開の明確化のために、また、学習内容の整理のために学習課題のプリントを用意した。イ・学習の手引―「参考―小論文を書くために」(方法提示)、「参考―小論文を書くために」(例文提示)を作成した。

2 学習指導計画

(1) 指導目標

価値目標―①②、技能目標―③、態度目標―④として、次のように目標を立てた。

① 徒然草のいくつかの段を学習することを通して、兼好のものの方・考え方・感じ方を理解させる。とりわけ、ア・世界観、イ・人生観、ウ・社会観、エ・自然観、オ・人間観について理解させ、兼好の人間像をとらえさせる。

② ①を通して、自らのものの方・考え方・感じ方を

深めさせる。

③ 徒然草に頻出する語、助詞(副助詞・係助詞)、助動詞、ならびに表現技巧(対句・比喩)を理解させる。④ 徒然草に関心を持ち、積極的に学習に参加するようさせる。

(2) 時期・対象・教材

① 時期―一九九五年一学期前半 ② 対象―三年生ニクラス(文系)

③ 教材

序・二・一九・五九・七三・一五五段(教科書)『古典総合』一九九四年 角川書店刊 七・二五・五六・七四・一三七(二部)・一四二・一七一一段(『日本古典文学大系』)

(3) 指導過程

① 基本学習

導入―「徒然草」を読むために

展開―兼好をとらえる

ア・世界観 イ・人生観 ウ・社会観 エ・自然観
オ・人間観

まとめ―私のとらえた兼好

ア・小論文 イ・感想文(*ア・イのうちどちらかを選択)

② 発展学習

五教材の中から一つを選択してレポート(要約・感想、

各二〇〇字) 提出。

(4) 学習指導計画

基 本 学 習 開 展	入 導	
	テーマ・教材	学習のねらい
④自然観 一美を見いだす 「をりふしの 移り変わるこそ」 (一九段)	「徒然草」を読むために 「徒然草」を読む(斎藤雅二) 「つれづれなるままに」 (序段)	①文中の語彙を文脈に沿って、的確にとらえる。 ②兼好の徒然草の執筆態度や心境について理解する。 ③「徒然草」・兼好への興味・関心を持つ。
③社会観 一理想の世を考える 「心なしと見ゆる者も」 (二四二段)	①世界観 一世のことわり 「蟻のごとくに集まりて」 (七四段) 「あだし野の露 消ゆる時なく」(七段)	①兼好が世の理をどうとらえ、どう受け止めているかという点について理解する。 ②兼好の考えに対し、自分なりの考えを持つ。 ③俳助詞、副助詞(へみ・だに)、助助詞「ず」の理解を確かにする。
②人生観 一生き方を考える 「世に從はむ人は」 (二五五段)	①兼好がどのような人生観を持っていたかをとらえる。 ②兼好の人生観が何に基づくものであるか理解する。 ③兼好の人生観について、自分なりの考えを持つ。 ④指示語の内容を押さえ文脈をとらえるとともに、助助詞「む・べし・なり・まじ」について理解を確かにする。	①兼好がどのような人生観を持っていたかをとらえる。 ②兼好の人生観が何に基づくものであるか理解する。 ③兼好の人生観について、自分なりの考えを持つ。 ④指示語の内容を押さえ文脈をとらえるとともに、助助詞「む・べし・なり・まじ」について理解を確かにする。
①自然観 一美を見いだす 「をりふしの 移り変わるこそ」 (一九段)	①これまで学んだ文法の知識(係助詞・助助詞・副詞)を活用して、本文を読み取る。 ②兼好の社会観に対し、自分の考えを持つ。 ③兼好の社会観に対して、自分の考えを持つ。 ④助助詞(き・つ・ぬ・じ)について理解を確かにする。	①兼好が、四季の変化の中で、どのような自然にどのような思いを持っていたかをとらえる。 ②人々の一般的なものの見方・感じ方と兼好の見方・感じ方との関係をとらえる。 ③自分なりの、自然の見方・感じ方を表現する。 ④係助詞・助助詞(あり・らる)について、理解を確かにする。
3	2	1

発展学習	基 本 学 習 開 展	
	ま と め	展 開
①レポート(要約・感想) 「飛鳥川の淵瀬」(二五五段) 「大老思ひ立たむは」*(五九段) 「貝をおほよ人の」(二七一段) 「花は感りに」(二三七段一部) 「久しくへだりて」(五五六段)	⑤人間観 一人間をとらえる 「世に語り伝ふること」 (七三三段) 「同じ心ならむ人と」 (二二二段)	①虚言がなぜ生まれ、虚言にはどのようなものがあり、虚言に対してどのように対するのがよいかとらえさせる。 ②兼好がどのような友を想定し、それぞれどのような思いを抱いているか理解する。 ③④⑤を通して兼好の人間観を考える。
②感想	①私のとらえた兼好 ①小論文	①兼好の世界観・人生観・社会観・自然観・人間観を「手引き」に基づき論証的に表現する。 ②各自の兼好観を小論文・感想にまとめる。
	①各自の関心に基づき、一つの章段を選択して読み、内容を要約する。 ②読み取った兼好のものの見方・感じ方・考え方について感想をまとめる。 ☆夏休みの課題として課した。	①1

二 「徒然草」学習指導の実際

(1) 基本学習①②人生観「生き方を考える」の場合
ここでは、「基本学習」の一つとして行った、「②人生観」の授業の実際を取り上げることとする。授業は、おおむね、次に掲げた指導案のように展開した。

板 書 計 画	発 問 (↑) 計 画 ・ 留 意 (☆) 事 項
世に從はむ人は ①人の生き方と機嫌 ・世に從はむ人 まづ機嫌を知るべし —— 人の耳せもさかひ」そのこと成らず 心にもたがひて	☆学習課題プリント配布。兼好の世界観について復習し、本時の目標を明らかにする。 ☆範読。学習課題プリントに基づく個別学習。 ↑①兼好は、この段でどのような生き方をどのような理由から求めていると思われるか。 ↑「世に從はむ人」は、どのように生きるべきだと言っているか。

さやうのをりふしし心持べきなり

・かならず果たし遂げむと思はむこと

機嫌を言ふべからず

生・住・異・滅の変化

まことの大事

しばしも落ちず

ただちに行ひゆめくものなり

◎変化の様

①「ついで」のあるもの

ア、季節

・春はやがて夏の氣をもよおし

・夏よりすでに秋に通ひ

・秋はずなはち寒くなり

・十月は小春の天気

イ、落葉

「下りまきしつはるに絶えずして

②「ついで」のないもの

生・病・死

死一前よりしも来たらず

かねて後ろに迫れり

↑イ「機嫌を知るべし」というのはなぜか。

↑ウ「かならず果たし遂げむと思はむこと」
 についてはどうすべきだと書いているか。

↑エ「機嫌を言ふべからず」という理由を述べなさい。

↑②「落ちずただちに行ひゆめく」とあるが、
 変化の様を具体的にまごめなさい。

↑ア本文ではどのようなものの変化について述べられているか。

↑イ挙げたものを「ついで」のあるものといはるに分けるなさい。

↑エ「季節」はどのように変化するとらえられているか。

↑オ「落葉」はどうか。

↑カ「生・病・死」についてはどうか。

↑キ「これに過ぎたり」の「これ」は何を指しているか。

↑「沖の千海……」はどういうことの比較か

☆この段の感想を生観を中心に書きなさい。

各観点ごとに分類した教材を学習することに、次の用紙に感想を書かせた。生徒が感想を記入した用紙を掲げる。

「徒然草」兼好をとらえる」

①世界観

一世のことわり

「蟻のごとく集まりて」

世の中は常にうつろ変わっていくもの、確かに私もそう思う。しかし、「自分」というものを磨くという目的で、常に何かを求めて生きていくのが人間であると思ふ。私はそう

(七四段) 「あだし野の露 きぬるときなく」(七段)

②人生観
一世に從はむ人は」(一五五段)

③社会観
理想の世を考える」
「心なしと見ゆる者も」(一四二段)

④自然観
一美を見いだす」
「をりふし」
移り変はるこそ」(一九段)

⑤人間観
人間をとらえる」
「世に語り伝ふるごと」(七三段)

「同じ心ならむ人」(一二段)

ありたい。名譽や利益だけにとらわれ、それが人の「人格」や「もの見方」を悪いように変えるのはいけないと思ふ。
 *しっかりと考えを持っていますね。

死ということについて兼好は、「おぼえずして来たる」と言つた。私も確かにそう思う。だけれど「生きる」ということについても似たような事が言えど私は思う。もし「死ぬ」ということがあつて偶然にやってくるのなら、「生きる」ということもその偶然の連続なのではないかと思う。そう思うとどんな人間にとつてもその偶然の一秒一秒が大切だと思ふ。

*なるほどそういう発想もありますね。しかし、そうかんがえるとき人間の意思はうかんがえられないのでしょうか？

もつともなごだと思つた。兼好の時代だけでなく、現代でもそのことがいえると思つた。子どもを思う親の心、親代を思う子の心は、どんな人でもあると思う。確かに盗みなどをやる事は悪い事だし、絶対にしてはいけないと思うけど、自分の事しか考えず世の中すべての人の気持ちになつて物事を考えようともしない人は、もつとも悪いことだと思ふ。

*私も同感です。しかし、どうしても自分を中心に考えちゃう。もう人間ではないでしょうか。そこが難しいところですね。

兼好はものすごく感受性の強い人だと思ふ。季節を目だけできとらえるのではなく、体、心すべてで感じ取つている。私がおも、どの季節が一番美しいと思ふかとはずねられたら、答えが出ないかもしれない。というのはやはりどの季節も自分の心に向かひみわつていくものがあるからだ。私にとつてはどんな季節も言葉に言いつくせないほどの感動を与えてくれる場面を持つていて思う。

「うそも方便」その言葉は私はよく聞く。確かにうそをつかなければならなかつたり、相手の事と思つて、という場合にははしかたがないと思ふけど、一つのうそのつじつまを合わすために、またうそをつく、私はそれが、とても恐ろしいことだと思ふ。それに自分のいいいうそをつくと、人は人間にとつてもうすぐなげなく、おろかなことだと私は思ふ。
 *しっかりと自分の考えを持ち、それが的確なことばで表現されていますね。

(2) 基本学習のまとめ—小論文の場合
 小論文を学習のまとめとして書かせるにあたり、次に掲げた手引きを用意した。

〔参考〕—小論文を書くために
 兼好の(世界観・人生観・自然観・社会観・人間観)
 「—」 「段を中心に」

1 序論—小論文を書く動機・目的・方法など

〔例〕

(1) 「徒然草」は、いくつかの説があるが、元弘元年(一一三一年)頃に「応の成立をみた」とされている。以来、六百数十年にわたって、人々に広く読まれ、さまざまな影響を及ぼして来た。「徒然草」の内容は、説話・処世訓・自然感嘆など多岐にわたっている。それぞれに兼好のものの見方、感じ方が鋭く表現されて、今日なお示唆深い。本論では、「—」の段を取り上げて、兼好の(世界観・人生観・社会観・自然観・人間観)を明らかにしたい。

(2) 優れた古典隨筆文学として有名な「徒然草」を書いた兼好はどのような人物であったか興味深い。ここでは、「—」をとりあげて、兼好の(世界観・人生観・社会観・自然観・人間観)について考えてみたい。

2 本論—中心となる問題を具体的に考察し、筋道だてて述べる。

〔例〕

(1) 「—」は、「—」という内容の章段である。まず、この段の次の表現から考察する。

① 「注—原文を引用する」

② 「—」
 ここには、「—」という考え方が表れている。これは、兼好の「特徴的な・独特の・伝統に基づく、根本的な、一つの(世界観・人生観・社会観・自然観・人間観)を表すもの」と関連するもの、「つながるもの」といえる。

次に、兼好は、
 ③ 「注—原文を引用する」

と述べている。(このように述べる理由は、ア、イ、ウの三点である。ここからは、「—」というものの見方がよみとれる。(これは、「—」という表現からも同様に読み取れるもの見方である。)ここから兼好の(世界観・人生観・社会観・自然観・人間観)の(特徴・一端・本質・根本)を読み取ることができる。

最後に、次に掲げる表現に注目したい。

④ 「注—原文を引用する」

⑤ 「—」

これらは、「—」について、述べたものである。これらの表現には、兼好の(—)という考え方がでている。(これは、「—」という箇所にも表れている。)このような考え方は、兼好の(世界観・人生観・社会観・自然観・人間観)の(基本・特徴・本質)となつていと考えられる。

3 結論—全体のとらえ

〔例〕

以上、兼好の(世界観・人生観・社会観・自然観・人間観)として、明らかにしたことをまとめれば、次のようになる。

① ②

〔参考文獻〕

この手引きは、次の点をねらいとして用いた。

ア. 小論文に初めて取り組む生徒に、経験的に小論文の書き方について理解させること。

イ. 手引きにしたがって書くことで、自らとらえた兼好のものの見方・考え方・感じ方を論証的に表現できるようにすることをねらった。小論文の手引きは、次の点を工夫した。

a. 書き出しの例示 b. 接続のこまばを用いた構成の例示 c. 論証的な文体(引用・帰納・考察・補説)の例示 d. 考察の過程で参考となることばの例示

また、ここでは省略したが、手引きに基づいて書いた小論文の例文を用意して参考させた。

(3) 発展学習

課題プリントに示した五つの観点のそれぞれに用意した章段から一つを選択させ、要約と感想とをまとめて提出させた。

三 生徒の表現とその考察

1 基本学習における感想文

(1) 「人生観・生き方を考える」の場合

(A) 私も世の中に順応するためには、時機を知らなければならぬと思う。①でもそれはなかなか難しいことで、もし物事の都合のよい時機を本当に知ることができたら世の中には「後悔」なんてなくなるのだらうなあと思う。時がたつのは本当に早く、時機を知ってやりたいことはやっておかないと、いつ死が訪れるかわからない。②悔いを残して死を迎えないよう自分の生き方をしっかりと見つけるべきだと思った。(NC女)〔注〕番号、傍線は便宜上渡辺が付した。以下同じ〕

(B) 変化について作者は、季節や人の命のことを書いている。③でも今の私はどうしてももっと細かい、私自身の心の移り変わりのことばかり考えてしまう。これはきつと私にまだ若いからだと思う。人はいつ死ぬかわからないし、もしかしたら明日死ぬかもしれない。④でも私はそんなことをわかつていながら心のどこかでいつもまだ死ぬはずがないと思っていて、未来の希望ばかりが頭をめぐる。これはいいことなのか、悪いことなのかいまの私にはわからない。

でも私はいつも未来のことはかり心配している。何も考えずにひたすら今を精一杯生きたい。(SM女)

(C) 兼好と私とは人生観は世界観に比べて共通点がある。本当に自分がしようと思ったことは私も時期などを見計らうのではなく、世間を気にせず、その時その一瞬に行動にうつすことが最も人間らしいことだと思う。しかし、⑤現社会ではそういう自分の本能のまま行動できないのが現状であり、どうしても⑥世間を気にしながら行動する自分たちは兼好の人生観こそ理想である。(SH男)

兼好の人生観(「世に従はむ人は」)についての読みの反応が感想としてそれぞれに述べられている。(A)は、①で経験から得た時機を知ることの難しさを述べながらも、兼好の考えに沿って、②のように述べている。(B)では、兼好の考えを理解しながらも、年若いために、また、三年生として進路のことが気にかかるために、③④のように、共感できない生徒のところが素直に述べられている。(C)には、兼好の人生観を理想とし共感を寄せながらも、「現社会」「世間」が気にかかり、実行することを断念せざるを得ない現状が書かれている。ここには、教材と生徒との対話・交流が「人生観」を窓口にして成立していると思われる。

ここでは、人生観に関する感想を紹介した。生徒は、他に、世界観、社会観、人間観、自然観から構成した教材を読み、それぞれに各自の読みの反応を感想文として書いて

いる。書くことを通して、各自の感じ考え発見したことを確かなものとしてとらえ、徒然草と兼好への興味・関心を深めていったと思われる。

2 基本学習における小論文

小論文について、一例を紹介し、考察したい。

(A) 兼好の人生観

「徒然草」について諸説様々であるが、元弘元年（一三三一年）に一応成立し、以来人々に様々な方面において影響を及ぼしてきた。「徒然草」には説話、処世訓、自然観照など多岐にわたって書かれているが、それぞれに兼好のものの方や感じ方が鋭い視点から描かれていて、成立から六百年たった今でも示唆深いものがある。本論では、「世に從はむ人は」(第一五五段)を取り上げて、兼好の人生観のひとつをあきらかにしたい。

(a) この段は人間は生きて行く上で物事をする潮時を知るべきだと述べた章段である。まず、この段の次の表現から考察する。

①「世に從はむ人は、まづ機嫌を知るべし。」

②「ただし、病を受け、子産み、死ぬることのみ、機嫌をはからず。」

①には、全く先に書いた内容の考え方が表れているが、②には、①の例外としてのものが書かれており、(b)これらは根本的な人生観を表すものといえる。

次に兼好は、

③「生・住・異・滅の移り変はるまことの大事は、たけき河のみなぎり流れるがごとし。」

と述べている。このように述べる理由は、すぐ後に書かれている、人生は「しばしも滞らず、ただちに行ひゆくものなり。」だからである。③からは人生は無常なものであるという見方がよみとれる。ここから兼好の人生観の根本を読み取ることができる。

最後に、次に掲げる表現に注目したい。

④「四季はなほ定まれるついであり。」

⑤「死期はついでを待たず。」

これらは「四季」と「死期」について述べたものであり、(c)読み方について同音であるが、一定のものと一定でないものとを対比させて効果的に用いている。(d)これらの表現には、兼好の「死期」への恐れにも近い考え方がでてくる。(e)このような考え方は、兼好の人生観の本質となっていると考えられる。

以上、兼好の人生観として、明らかにしたことをまとめれば、次のようなことになる。

①人間は、本当に成し遂げようとする重大事に対しては時機がどうであるかということは考えずに、どんどん実行すべきである。

②人生とは、勢いさかんな河があふれんばかりに流れるように、無常なものである。

③①の考えの理由として、死期というもののは不定のもので予測し得ない。(O・N男)

(注) 傍線、および(a)(b)等の記号は渡辺が付した。)

序論部の書き出し、また、本論部、結論部の傍線部に見

られる、接続のことばの用い方、論証的な文体、考察のまとめとなることばの用い方に、「手引き」を利用したことが表れている。この生徒は、次に挙げるように問題はあるが、「手引き」にしたがって書くことで、ほぼ構成の整った論証的な小論文に仕上げているといえる。この小論文には次のような問題点が見いだされる。

ア、傍線部 a は、この章段の内容を要約した箇所であるが、適切な要約となっていない。

イ、傍線部 b・e は、帰納的に兼好の見方をとらえるべきところであるが、的確にとらえていない。

ウ、傍線部 c・d には、読み誤りが見られる。

以上、一例を紹介し考察した。その他の小論文も併せて考えると、小論文の「手引き」は、論の展開を整え、論証的に文章を書くうえでおおむね有効であったと思われる。

しかし、以下のような、①対象とする章段の要旨を的確にとらえていない(的確に表現できていない)例が見られた、②論の展開に滑らかさと緻密さが欠けているものが多い、③引用したものから帰納的に本質をとらえる点が十分ではない、④引用が適切でないものが多かった、などの問題点も見いだされた。

四 「徒然草」学習指導の反省と課題

以下の指導目標の達成と学習指導の工夫の有効性という

観点に絞って述べたい。

1 指導目標の達成

①ア、世界観 イ、人生観 ウ、社会観 エ、自然観
オ、人間観について理解を深めることはできたと考える。しかし、兼好の人間像の全体的把握にまでは至らなかった。兼好の人間像についてまとめさせる時間を設ければよかったとも考える。

②基本学習における感想文を読むかぎり、兼好の感じ方・考え方と自らのそれを突き合わせながら、自らのもの見方・考え方・感じ方を広げていったと考える。

③徒然草に頻出する語、助詞(副助詞・係助詞)、助動詞、表現技巧(対句・比喩)に関し、一定の理解は得られたが、応用力として働かせるまでには至っていない。
④指導の工夫の①③によって、教科書どおりの順番で徒然草を扱った時よりも、関心を持ち、積極的に学習に参加したように思われる。

2 学習指導の工夫

①理解の観点設定

設定した観点が、教材を読む際の切り口として働いていたと考える。また、対話・交流するためのルートとしても働いたと考える。観点が一面的読みをもたらせたとも思うが、現時点では妥当であったと考える。

②指導過程―基本学習から発展学習へ

基本学習で何を育成するかを十分に検討していなかった。また、発展学習を夏休みの課題として簡略化せざるを得なかった点も反省される。しかし、指導過程に基本↓応用↓発展を組み込み、つけるべき力を応用力にまで高める指導を行う考え方は今後に生かしたい。

③理解と表現の関連指導

ア、感想文―生徒各自にとつての読みのおもしろさを引き出し、興味関心を深めると考えた。しかし、その有効性については、今後にさらに試み検証すべきであろう。

イ、小論文―引用の仕方、論の精密な展開、的確なことの使用、帰納法の適用等に問題点はあるが、三年生の読みとして、精確な内容理解とその表現を目標とする上で、さらに試みたい。

④学習課題・学習の手引きの作成

ア、学習課題―有効であったとは考えるが、今後、問題把握↓解決という学習を主体的に行わせるための「手引き」を工夫して作りたい。

イ、「参考―小論文を書くために」(方法提示)、「参考―小論文を書くために」(例文提示)の二つを「手引き」として与えた。生徒のほとんどが「手引き」を参考にまとめていた。「手引き」は、有効であったと考えるが、③のイで示した問題点もある。今後は、表現の系統的指導をも考え、有効な

工夫を考えたい。

おわりに

「徒然草」の授業を表現を軸に試み、その工夫の有効性を考察した。以前の授業に比べ、手ごたえを感じることはできたが、そのささやかな手ごたえが何によるか、実証的に報告することはできなかった。周到な実験・研究授業の必要も感じている。今後、先行研究に学ぶとともに、ここで用いた工夫を他の教材についても用い、その有効性をとらえていきたい。

付記―本稿は、第37回広島大学教育学部国語教育学会で

口頭発表したものを基にまとめたものである。発表

表時に助言くださった方々に感謝申し上げます。

(大阪府立和泉高等学校)